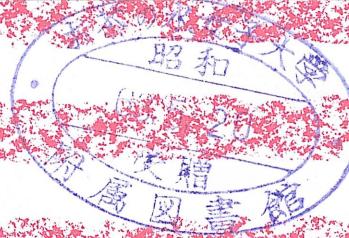


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

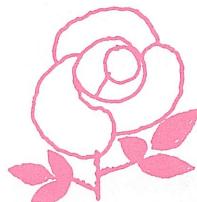
1988

4



お茶の水女子大学
児童学科研究室

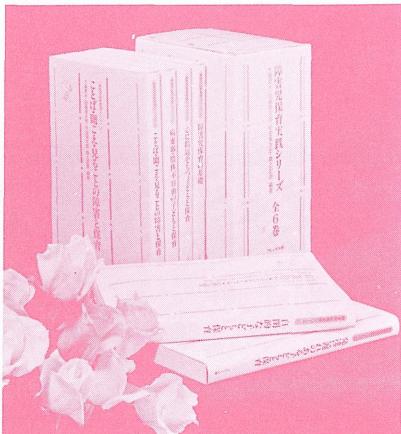
第87巻 第4号 日本幼稚園協会



障害をもつ子の保育に 必要な配慮はなにか?

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ 全6巻



第1巻 自閉的な子どもと保育

第2巻 発達に遅れのある子どもと保育

第3巻 ことば・聞こえ・見ることの障害と保育

第4巻 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育

第5巻 心に問題をもつ子どもと保育

第6巻 障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか? いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。このシリーズは、たんなる理論書や研究書でなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著

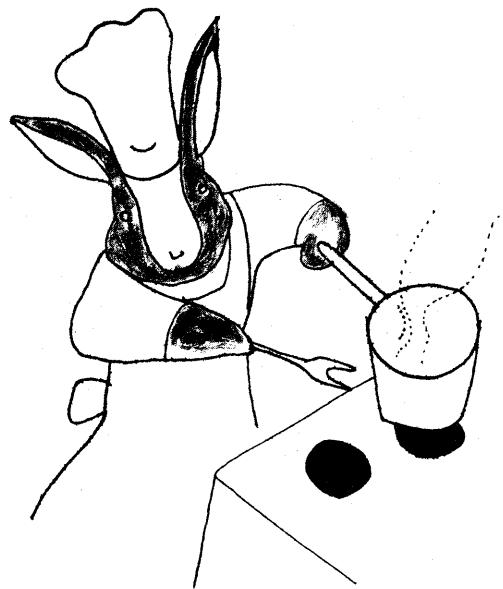
A5判・セットケース入り 各巻平均264頁 セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンターフックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十七卷 第四号

幼児の教育 目次

——第八十七卷 第四号——

〈巻頭言〉

これからの中等教育……………河野 重男……………（4）

受動を能動にかえる自我の力……………津守 真……………（7）

SF的読み解き 子どもという風景

第三十六回 桃太郎の背中より……………堀内 守……………（12）

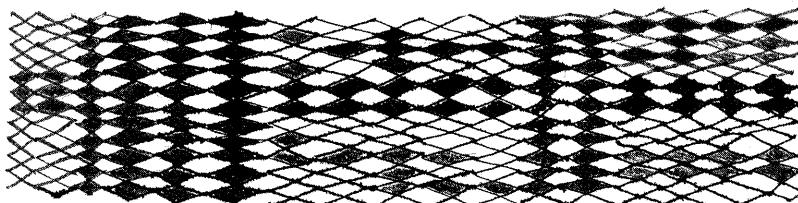
子どもと（1）

四月・ゆづくりと……………清水 光子……………（22）

新しい年度がはじまるにあたって……………村石 京……………（26）

© 1988

日本幼稚園協会



新入学児と学校……………濱口 紀恵… (33)

南の島の子どもたち(1)

——オープソな縦わり的保育がもたらしたもの——…浅野 恵美子… (40)

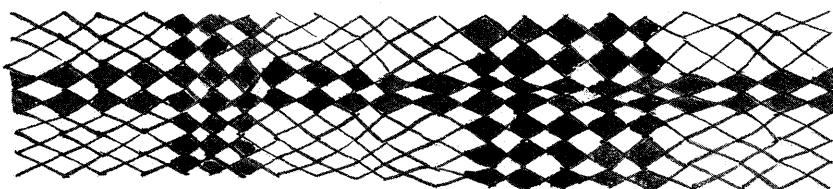
臨床の現場から子育てを考える その 1

働く母親にとって子どもとは……………鮑田 典子… (46)

若いお母さんたちへ

娘と共に暮らす中で……………はるにれの会 向山 陽子… (54)

カット・福田 理恵
編集部・向山 陽子



これから幼稚園教育

河野 重男

一 幼稚園教育要領改善の基本方向

新しい幼稚園教育要領の作成にあたって、その基本方向は、いさまでなく、昨年十二月に発表された教育課程審議会の答申に明確に示されている。

まず、幼稚園教育の基本として、次の四点を打ち出している。
ア 幼児の主体的な生活を中心に行開されるものであること

- イ 遊びを通しての総合的な指導が重要であること
 - ウ 幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じた教育を行うことが大切であること
 - エ 幼児が自發的にかかわることができるように人的・物的な環境の構成が大切であること
- この四点を幼稚園教育の基本としておさえるということになると、これは現行の教育要領を支えている理念とまさしく共通しているということになる。そのことを原点として確認したうえで、たとえば「遊びを通しての総

合的指導とは何か」ということが必ずしも実践の場で正しく受け取られて実践されているとはいえない実態があることをふまえ、さらに社会や教育環境の変化の中で、その意味を新しく問い合わせているものととらえることがだいじであろう。

答申では、こうした幼稚園教育の基本に立って、とくに「ねらい」及び「内容」について次の事項が全体を通じて十分達成できるよう配慮して改善することとしている。

ア 人とのかかわりをもつ力を育成すること

イ 自然との触れ合いや身近な環境とのかかわりを深めること

ウ 基本的な生活習慣や態度を育成すること

この三つの配慮事項について考えるとき、それをいつも「何のためか」という本質的な問いに立ち返ってとらえることがだいじである。たとえば、「基本的な生活習慣や態度の育成」ということについてである。

基本的生活習慣の確立といえば、とかく「しつけ」の

問題というように狭くとらえられがちであるが、それを広く、「何のための基本的生活習慣か」という視点からとらえ、位置づけることが必要である。そして、このことについては、答申の中で、極めて明快に指摘されている。

「幼稚園生活における具体的、自発的な活動を通じ、健康で安全な生活の基盤となる基本的な習慣や態度を育てるとともに、社会生活や様々な事象に対する積極的な関心、物事に取り組む意欲、道徳性の芽生え等を培い、自立への基礎を養う。」

ここには、幼稚園教育における基本的生活習慣の性格づけは、まさしく「健康で豊かな生活の基盤」としてであり、また「自立への基礎を養う」ものとしてというところに求められていると考えられるのである。したがって、この視点は、ひとり幼稚園教育の段階だけでなく、小・中学校の段階における基本的生活習慣の性格づけについても貫徹されなければならないものといえる。

二 自己教育力の育成と幼稚園教育

以上にみてきた幼稚園教育要領改善の基本方向は、最近の教育課題として強調されている「自己教育力の育成」という視点につながっている。周知のように、昭和五十八年に出された中央教育審議会の「審議経過報告」では、これから教育改善における自己教育力育成の重要性を謳い、それを、「学習への意欲と意志」「学習の仕方の習得」「生き方の探求」を内包する視点としてとらえている。これは、まさに「自立への基礎」なのである。

この場合、たとえば基本的生活習慣の形成ということについても、新しい視点からとらえることが必要になる。基本的生活習慣ということばは、とかく「きまりを守る」とか「箸が使える」というように狭くとらえられる。がちだが、もっと広義に学習の態度ともいすべきものも含んでいることがだいじだと思う。つまり何事にも積極的な関心と好奇心を持つてそれを学習しようとする旺盛

な意欲と、それを最後まで追求してやり遂げようとする強固な意志と気力を持つことを基本的生活習慣として大切にすることなのである。

ここで、倉橋惣三が、既に大正十二年頃に幼稚教育について次のように主張していたことが想起される。

倉橋は、現代社会は、何よりも「神経が健全で強健な子ども、困難に打ち勝って疲れず、所信と使命を実行し得る人間」を必要としていると喝破していた。そのため、戸外保育の重視、自然の教育力の活用、机からの解放、小さな手仕事から大筋肉を働かせていく方向への方法の転換、幼稚園生活のスケールを大きくしていくことなどを主張し、大規模なものを製作、構築する主題に教師と子どもが、ともに全身全霊を挙げて没頭することによつて達成される「精進感」を重視していた。

倉橋のいう「自由感と精進感の統一」は、まさに自己教育力の育成を志向する視点だといえるし、これが「自立への基礎」だといえると思うのである。

(お茶の水女子大学)

受動を能動にかえる自我の力

津守 真

人の身体は、生れつきの体质や病気など、思うようにならない条件に左右される面が大きいことは認めないわけにはいかない。しかし、その場合でも、人が能動的にかかわる部分が少なからずあることは、養護学校の子どもたちをみているとわかる。

六才のA子は脳腫瘍の後遺症であるが、二月号に記したように二学期は身体的に好調で、しっかり歩き、よく遊んだ。私も、自分のエネルギーをA子に向けて毎日を過す時をたのしみにした。三学期もその調子で進むことと疑わずに、新しい年を迎えた。

一月の最初の保育の日、母親の腕からおりたA子は、保育室の入口のワゴンの前で立止つたが、口に入れても良いようにと掃除しておいたおもちゃには手もふれず、部屋に入った。母親はオーバーをぬがしながら、この正月休みは最低だったんだと言う。発作がひどくなつて、この数日は、夜になると、五分おきぐらいに発作を起すので、子どもも安眠できないのだという。新しい年を、力を貯えて迎えようと意気込んでいた私は、その最初

のところで、大きな黒雲に襲われたような気持になった。これまで調子よく進んできたのに、A子自身にも母親にも手に負えない外力により、生活の根底が揺さぶられたように思われ、明るいはずの新学期が暗転した。書いていて大げさな表現のように思えるが、子どもとかかわって生活する保育者に、子どもの世界の中で起った変化が、何らかの力をもたないはずはないから、私が暗い気持になつたのは当然であろう。

A子はいつものようにはって玩具棚にゆき、小さなボールをころがして、私にとつてくれと声をあげて催促した。二、三度ボールのやりとりをすると、私の膝によりかかって、いないいないばあの遊びを求める。母親は、立ち去るときに、「こういうことがあると、いつのまにか上昇志向になつていた自分を反省します」と言つた。

A子は私と数度いないないばあをくり返すと、両手を口にあて、うつろな眼になり、しばらくすると、私に身を寄せて軽いいびきを発している。これがA子の発作の形である。しばらく抱いていると、目を開けて立上り、昼食のおぼんのはいっている戸棚をあけてくれと手を上げる。A子の好きなおぼんを出してみると、その間にまた両手を口にあて、うつろな眼になり、私によりかかる。私は通りかかった大人に頼んで布団を敷いてもらい、膝からおろしてA子をねかせた。二、三分すると、A子は細く目をあけ、傍に坐っている私をじっと見て、また目をつぶる。A子はときどき学校で眠るが、これまで一度眠ると一、二時間はどんなに周囲が騒がしくとも、目を覚ましたことはなかつた。この日は頻繁に目をあけ、例の発作の形、両手を口にあて、私をじっと見る。私はA子の傍を

はなれられずに数時間を過した。

A子の傍にいる間に、私のところに何人も他の子どもたちがくる。いつもだと私の手を強くひく子どもも、この日は不思議に静かで、自分の遊びを見つけてくれる。K男はひとりで石にえのぐで色をぬり、ときどき私のところにきて笑い顔をみせる。病人のいる家庭で、子どもたちが足音を忍ばせて寝床の傍を通るときの様な空気が漂っている。大人の勝手ではなく、本当に病気が襲ったときに、子どもたちは人力を超えた大きな存在を、だれにもいわれないでも体の内に感じているかのようである。二年ほど前まで激しい発作を起していたH夫も、傍でしばらく紐をいじっていたが、他の部屋に立ち去り、身軽く移動するM夫も、布団のわきを走りぬけながら決してA子を踏むことはない。A子がときどき目をあけたとき、傍の子どもたちの声は明るい和やかさを与えてくれる。

発作は脳の中の生理的変化で人の意志を超えた外力によるできごとだから、本人にとっては予期しないときに襲われた災難のようなものである。人はこれを避けることはできない。しかし、そのように受動的に受けるよりほかない事態にあっても、その不快で困難なことに立ち向う自分に、柔軟な強さができるいれば、その事態は乗りこえやすくなるのではないか。また、そのことに周囲の大人们ちは手をかすことができるのではないか。

話すこともせず、歩きはじめたばかりのA子は、発達の度合からいうならば、ごく初期の段階だが、それなりの自分自身をもっている。したいと思うこと、嫌なことははつきり

している。先学期のはじめ、A子は自分のロッカーまで五メートルほど歩いて弁当をとりにゆき、それを手に持つて食卓まで歩いてきたことがあった。そして包みを開いてくれと私は要求した。まだ朝の十時半ころだったが、ここには子どもの素朴で真面目な生活があるように思えて、私は昼まで待たせるわけにはいかなかつた。食べ終ると、A子は自分で玩具棚の前にもどつて遊びはじめた。子どもが自分から願いを起こし、努力して運んできた弁当を自分で食べることができたときに、このひとめぐりの行動は、他人ではない自分がしたとの実感をもつた行為となるだろう。子どもが生活している小さな舞台の上を、この子どもは自分のものとして使いこなしている。すなわち、自我の力をここに見ることができる。いま、発作という抗しがたい外力に受動的にさらされたとき、この自我の強さが、それに立ち向わせる力となつていると言えないだろうか。

A子は発作を起こしたあと、細い目をあけて、自分がこんな災難にあつてゐるときあなたはほんとに傍にいますかというように、慕わしげな目で大人を見る。それから、いつも好きないないないばあの遊びをしてくれと、弱々しい手を差し出す。傍にきたM夫がA子の好きな小さなボールにマジックで字をかいていると、それをとろうと手を出しが、その途中で発作を起してがつくりと首を垂れ、手をのばしたままいびきを立てている。これだけのことが見られるということは、発作という生理的なできごとの中にも、子どもは自分が能動的にかかわる部分を見出そうとしていることを示しているのではないかと思う。

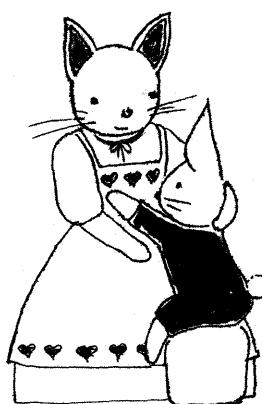
このことは、小さな子どもだけではなく、大人にも共通のことのように思える。身体的

にも、社会的にも、自分とは関係のないようと思われる外力に襲われたとき、その受動的な事態を能動的にかかわりうるものにかえてゆくのは、人間の自我の力である。精神のより広い世界の中に、そのできごとの意味を再発見するのは、その人間のつくり上げる文化の力でもある。

A子の母親は、いままでも発作がつづく時が何度かあつたが、今回顕著なことは、発作のとき、夜中でも親の顔の上に寄りかかることですと語ってくれた。こうすると、子どもはいくらかでも耐え易くなるのだろう。

新年のはじめ、養護学校の一隅の保育のひとこまである。

(愛育養護学校)



背中は

第三十六回

桃太郎の背中より

堀内守

「背中」は、もちろん「せなか」と訓みます。「もちろん」とは、たぶんオトナが共有している了解事項をアテにしているからこそいえることで、時により、その了解が少しゆらぎはじめることがあります。

「背」だけで意味が通ずる。それなのに、なぜわざわざ「中」をつけるのか。この辺がオトナの了解事項を少しずつゆるがす理由です。いかにも平凡、いかにも閑人の問い、のように見えますから、オトナたちは、「そんなことにかまっちゃいられないよ」とばかりに、この問い合わせを無視してしまうのでしょうか。

忙しい時代です。だからそういうオトナたちの気持もわからないではありませんが、時にはちょっと立ちどまつて、「背中」と「背」をくらべっこしてもいいじゃありませんか。

いえ、むしろ話は少し副産物をプレゼントとして送つてくれるかもしれません。たとえば、はじめっからオトナとコドモの区別はあるわけはないので、右のような問

いをあっさりと無視できるのが「オトナ」なのであります。大人であっても、そのような問い合わせを無視しない者もいます。そういう人は、ここにいう「オトナ」とは少し違います。少しどころか大いに違う。

あ、あなたも無視して行つてしまわれるのですか。やっぱり、あなたも「オトナ」でいらっしゃる。ほめて申しあげているのですから、どうぞお怒りにならないように。

それにもしても、みごとな「背中」をしておいでですね。美しい。たくましい。やさしきもある。

背中を

遠ざかって行く「オトナ」の背中は、単なる「背中」ではありませんね。何となく、何かを訴えはじめるではありませんか。それも、二通りの文脈で。

ひとつは、「背中」が「背中以外のもの」を示しはじめるとのことです。

「背を見せるか」となれば、不敵さのあらわれ。「背を

見せる」は、時には裏切りをも示します。何と、「背○」の意味のものすごいこと。背反、背任、背逆、背信、背約、背教、背違、背盟、背徳、その他もろもろ。まったく「そむく」「うらぎる」「みする」等のマイナスのイメージに満ちあふれています。中性的なのはわざか「背骨」とか「背景」ぐらいなものでしょう。

ハイ。「背」は「ハイ」とも訓むのですね。「せ」とも、「せい」とも訓みます。ハイ。セイゼイこれとおつき合いください。

面白いのは「せ」と「せい」ではイミが異なってくることですね。「せ」は「背中」でした。ところが「せい」ともなると、これは身の丈たけを示すのですね。ご存知でしょう。あの「柱のきずはおととしの、五月五日のせ、いくらべ……」の歌詞を。あれを「せくらべ」としたら調子が合いませんよ。やっぱり「せい」でなくちゃ。そうでしょう。樋口一葉の作品だって『せいくらべ』でしょう。『せくらべ』ではありません。

「せい」となることで——どうです。こんなに異なつ

た風景が見えてくるではありませんか。え、少しは関心をおもちになつた?

なら、あなたは「オトナ」から抜け出しはじめたわけださあ。

あなたの「背」も、異なつた意味を発信しはじめます。それが第二の文脈で。

あの万葉の歌にもあるじゃないですか。「わが背」と呼びかけてるあれですよ。「背の君」「いも背」とあら、あの「背」。

何と「背」は、いとしさのシンボルなのですね。

さて、そこで想像ください。

さて、そこで想像ください。

「わが背」となぜ呼んだのか。どれくらいの距離になると、「わが背」と呼べるのでしょうか。ぴったりとくつづいていて、ささやくように「わが背」と呼びかけるか。

まあ、そういうことはないでしょうね。なぜかという

と、その状態ならば、名前を呼び合わなくともよいからです。だから、「わが背」と呼ぶには、距離ができるいなくてはならない。その「距離」は単なる物理的な距離ではありませんね。心理的? それだといかにも現代風です。どうしても、それを表現するにふさわしいことばが必要です。たぶん「神話的」がぴったりでしょう。そう、「神話的距離」ださあ。

相手は遠ざかっていく。しかし、呼び返したい。遠ざかるのと、近づけたいのと。この相克のなから生まれるのが「背」に向かって呼びかけることでしょうね。

「わが背」とは、「自分の(身体の)背」ではない。あなたへと去っていくあなたを「わがもの」としてつなぎとめる叫びですね。

あなたもおわかりのように、相手を「あなた」と呼ぶのは、もともとあなたに去っていく人を「わが背」としてひきとめるところから生じたのではないでしょうね。

「存知の映画にもありました。『シェーン』です。去

つて行くガンマンに向かい、少年が呼びかける。「シェーン、カム、バック！」。そのエコーが何回もダブる。

あ、あなたもあのシーンをおぼえておられます？ ら話は直観的にわかりますな。

背中より

「せなか」「せい」「せ」——と、こう三つを並べてみます。このうち、あなたの語彙のなかにはどれがいちばん早く入ってきたとお思いですか？

それに「せな」をつけ加えてもかまいません。

あ、そうせつかちに「背を向け」ではいけません。せいぜい落ちついで、あれこれと思いのほどをたぐり寄せていただかないと。

いちばん短かいから、「せ」が先だらうとおっしゃる。なるほど。そう考えるのも一理ありますね。でも、その一理はどうも「オトナ」のそれですね。そんなに簡明に、経済的に行きはしないのが人間のドラマの楽しいところでしてね。

）ういうときには身近なところで通訳を求める必要があります。通弁、通辞、翻訳。

あなたは「手」や「目」を幼ないときどんな表現で呼んでいたとお思いですか。「て」あるいは「め」と短かく呼んでいたのでしょうか。「てて」「めめ」「おてて」「おめめ」でしょう。

短かい方がよいという常識に反し、「おてて」や「おめめ」なのです。

いいですか。ここに長さを読みとつては何にもなりません。むしろ、「て」や「め」よりも、「おてて」や「おめめ」の方が身体のリズムに合う——このことを読みとるべきなのです。何ならやつてごらんになるとよい。

「め」と「おめめ」。「て」と「おてて」。

そうです。おわかりでしょう。「め」や「て」という音よりも、「おめめ」や「おてて」の音の方がリズミカルです。

そこで、話を戻しましょう。いかがですか。

「せなか」「せい」「せ」のうち、いちばんはやくな

たの語彙に入ってきたのは「せなか」のはずです。次が「せい」でしょう。それも「せい」と発音するよりも「せえ」の方に近かったです。「せ」はすっとあとになつて、漢字を習得してからのはずです。

背中で

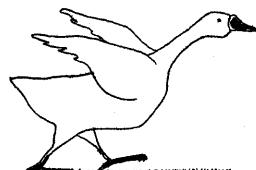
あなたは「背中で」眠つた。おんぶしてもらつたはずですね。「だっこ」は短かい距離と短かい時間。「おんぶ」は長い時間と長い距離。これが人類共通の生活時間です。

したがつて、あなたは、自分の背中に気づく前に、まわりの人びとの背中を見て、人びとを分類することを学んだはずです。この人の背中は「親しい」。この人の背中は「よそよそしい」。こちらの背中は……というように。その結果、「背中」は、父の、母の、青年の、老人の……というように分類され、さらに若い、老いた、疲れた、元気いっぱいの……というように、意味をもつものとなつていきました。

記号としての背

「背中」から「背」に移るには、文字を習得する必要がありました。人間の身体をモデルにし、山の背だとか、波の背だとかの比喩を知り、また「そむく」に統く一連の熟語を手に入れるには長い道程を歩まなければできなことです。

でも、その途中にいろいろな中間的な「背」が用意されていました。



何よりも重い意味をもって入ってきたのが「背負う」

という行動でした。「背負い投げ」「背負い太刀」という特殊なものよりも、「背負う」という、労働の代表のごとき運命が待ちかまえていました。

「せおう」が「しょう」に縮まるのもよくわかります。人類はいろいろなものを「背負って」生きてきました。いまだも「背負って」います。荷である場合もある。運命である場合もある。

あ、お疲れですか。では、背もたれをどうぞ。背筋をそう伸ばして聴いておられたからお疲れになつたのですね。どうぞ、リラックスしてください。椅子の背もた

れ、柱に背をもたせるのも一工夫ですから。

背筋をピンと張る、と申しますね。「気をつけ！」の姿勢です。背筋を伸ばすとは、正座のあかしでしきう。背をまげれば、老いた人の姿のあかし。あ、ネコが背を曲げた。よく曲がるものですね。人間は、あうまくは曲がらない。

背中で思い出しましたが、絵本などでは背の意味するところをちゃんと描き分けていますね。わかり易くするために、桃太郎の絵本でももち出しましょうか。

まず、おじいさんとおばあさん。ちゃんと背中を描き分けていますね。おじいの方は背中が広く、かつ角

ぱっている。おばあさんの方が背中は小さく、かつ丸味を帶びている。生まれたばかりの桃太郎は、全体が丸味を帶び、背中はふっくら。おじいさんとおばあさんの背中が薄いのと好対照です。

やがて、桃太郎が鬼が島へ行こうと決心する。とたんに桃太郎の背中はぐーんと変わってしまいます。背筋はまつすぐになる。これに対し、おじいさんとおばあさんは、きびだんごをつくっていますが、まるで服従しているかのように背筋に張りがなくなります。明らかに、推定される年齢以上に背が丸く描かれます。そうしないと、桃太郎が引き立たない。

桃太郎は、晴れの装束で身をかためています。鉢巻をし、背中には「桃」の紋所までつけています。太刀をはき、目は遠方を見つめています。

老夫婦の方は普段着です。そして、極端に背を丸めて描かれている。だんごを丸める作業をしているから必然的にそうならざるをえない、と判断しないでください。

そうではないのです。

これは、養父母と子というヨコの関係のなかに、あらたに支配と従属というタテの関係をもち込んだからです。イヌ、サル、キジの絵は、その延長上にあります。

絵としては鬼の絵が象徴的です。鬼は「背中」から描かれています。正面から堂々と描かれていませんね。いくつかの絵本を比較してみても、そういうふうになっています。

第一は「背中を見せて」逃げる姿として。

第二は、桃太郎に降参した場合で、服従の姿勢として。

鬼の背中は、なかなか頑丈そうで、筋肉も隆々としています。みると強そうです。それが背筋を伸ばして描かれたら、鬼の敗北は描けません。そこで、背中を曲げた形で描くのです。

これに対し、桃太郎は、床机に腰をかけ、背を伸ばし、視線は鬼を見おろす形になっています。赤い頬は、鬼の鈍い皮膚の色と対照的です。

背中からのメッセージ

桃太郎の背中のまん中あたりに、紋が描かれていました。桃の形です。桃太郎だから桃。これは実に単純な連想です。ふつうの紋章には、こんな単純なものはないのです。もっと抽象化したり、もっとデフォルメしたりして紋にするのではないでしょうか。

生まれたときの桃太郎は丸々しています。髪の毛が生え揃っていますから、ふつうの人間の子どもとは違った状態で生まれたことを物語っています。ところが、鬼退治に出かけるまでに——その髪型から判断して——まだ成人していない。十五歳以前だということになりそうです。

絵本からはどのような歩き方をしたのか見当はつきませんが、あれだけの装束をつけますと、かなりぎごちないう歩き方になつたのかもしれないと推定できます。ある

いは、初めて正装をしたので得意になつて歩いたのかもしれません。

第三。きじ、犬、さる、の三匹の背中は実に不自然になります。だって、きじは首に綱をかけて、車を引っぱる役割ですから。犬は、前足で車の柄をもちあげ、口を

する私たちの観点からすると、どうもよくわからないのが、鬼が島からの凱旋の光景です。

第一。おじいさんとおばあさんは、顔はにこやかに、背中は丸めて、手は歓迎し、というぐあいにアンバランスになっています。歓喜の表現は、元来アンバランスを特性とするのですが、それにしても、両人の「背中」は家來のそれに近い姿勢といわねばなりません。

御主君さまのお帰りだ、という感じ。

第二。桃太郎は、威風堂々の帰還というよりは、扇をもつて応援の姿勢になつてしまっています。ぶん取った宝物を積んだ車を引くきじと犬とさるを応援するのです。

桃太郎の背中は、応援団長の背中に変じています。凱旋将軍の姿といよりも、宴で踊る道化役の背中に近くありませんか。

ともあれ、「背中」からのメッセージを読みとろうと

あけて苦しげです。さるは車を背後から押しています。

この背中も、車を押している姿よりも、車にうしろから取りついている姿のように見えます。

三匹とも、こんな車を引くのはいやだと悲鳴をあげているように思えるのです。

背中の歌

さて、「背」や「背中」をうたつた歌はどんなバターンにまとめられるでしょうか。

第一は子守唄です。

子を眠りに誘う歌は、直接「背中」をうたってはいませんが、明らかに「背中」の子に呼びかけています。親

しみのある「背中」が浮かぶのです。泣く子をおどしたり、なだめたりする歌もあります。この場合は「背中」がゆすられています。また子守のつらさをうたつた歌は「背負う」ことのつらさをうたっています。

第二は、苦汁の労働をうたっているものです。背中は曲がっています。

第三は、人間関係を背負っている背中。さまざまながらみが背中で合流し、絡み合い、「背に腹はかえられぬ」という諺のすさまじい一面をかいま見させてくれます。

「背中」の歌がいちばん多いのは何といつてもCMなのです。広告、ポスター、それにテレビのCMの映像。

これらに登場する「背中」は、演技としてはぎごちないのがほとんどですが、かわいらしさ、こつけいさ、おかしみ、わびしさなどの混合したふしぎなトーンを示します。何なら、意図的にお調べいただいてもかまいません。

背中は演技しようとしてもなかなかうまく応じてくれません。オーケストラを指揮する指揮者は、客に背中を見せ続けます。それは具体的に目に入ります。しかし、同じ背中であっても、もっと抽象的な背中もあります。子は親の背を見て生きる。そういうときの「背中」あるいは「背」は、生きることの凝縮した、意味発信の場です。

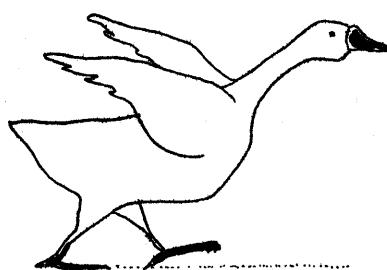
幼児の背中はどうでしょう。この小さな、丸味のある背中は、目をかけてやり、声をかけてやらないと意味が拡散する奇妙な舞台です。

さあ、もうお話ししたいことはほとんど尽きかけました。あなたはもうお出かけになりますか。

そうそう。そして歩いていかれるあなたの背中は、あなたのごきげんのいいことを示していますよ。ビデオにでも撮っておきましょうか。そして、あとで何回も映してみるのです。すると、あなたの背中は、きっと粹に見えたり、悲しみを秘めているように見えたり、最初に見たときよりも異なった意味を示しはじめるでしょう。そういう再発見のよろこびもあるのです。

ああ、あの人うしろ姿がいつのまにか子どものうしろ姿のように見えてきた。人それぞれ、いろいろなものがとを背に負っている。

(名古屋大学)



四月・ゆつくりと

清水 光子

どこもかしこも白一色、雪、雪、ああ、早く春にならないかなあ、って、私、本当に春を待った。土の色と匂いに憧れてた——。今やつと春が来た。雪どけ水が音を立てて流れている。そこに水仙やヒヤシンスが芽を出したと思う間もなく、毎日毎日、ほんとうに毎日、空のどこからか引っ張られてでもいるように伸び、筆の穂先のような蕾がふくらんでくる。胸がわくわくして、黒い土の上を大声で叫びながら走りたい！ そんなことばを雪国の少女が言つた、四月のはじめ。少年達はすでに原っぱでサッカーボールを空をめがけてけり上げている。屋根の雪の残りが、その喚声でどうかするとなだれになって大きな音をたてて滑りおちる。数十年前、北海道でのこと。

自然は人のねがい、思いにかかわりなく巡つてくる。しかも先へ先へと準備しながらで

ある。それに気がついて、心をときめかせるのは大人より子どもの方が強いのかも知れない。“誰でもずっと前は子どもだった”のにどうしてその感じ方が鈍くなってしまったのだろう。

四月、はじめての集団生活に入つてとてもたよりない気持、やるせないような気持でいる子ども達。A君は新しい運動靴にはきかえて、先生の手を握つて保育室の前の庭に出た。花だんをみたら、何と蟻がいるではないか！ 花だんのあちの桜草の根元に、あゝ、いくつもいる。A君は先生に知らせたかった。でも先生はブランコにいる友だちの方へ誘つていく。A君の何とも満たされない思いはどうなるのだろうか。

親も先生も、子どもをめぐる大

人は子どもの出あう新しい環境に
何とかして慣れさせようと一しょ

うけんめいなのである。子ども達
も一しょうけんめいなのである。

そのお互いの一しょうけんめいさ
が、あんまり、びんと張りつめてしま
うと……。親と子、先生と子ども
の間にもどこかびったりといかな
いことができてしまう。



お互ににはりつめないで気らくな何かがほしい四月である。

倉橋惣三先生の『幼稚園雑草』の中に「子どものしもべ」という文章がある。「先生だと思うから間違うのです。私たちは子どもに仕えるのです。」と。そして「私たちは子どもの侶とか、師とかいいもし、思いもしていながら、なかなかかもって子どものことはろくに考えていいないので。」と指摘されているのをよむたび、私は胸を刺される思いがする。「教うるよりも仕うるの難きかな。」ともいわれている。子どもの目線に下りるということはどういうことか、子どもとともに生活するということはどういうことか、私たち大人、親も、先生も、子どものよき成長を願うあまり、つい視野が狭くなってしまうようで、恩着せがましくなったり、ひとりよがりになったり、子どもの心の願いを見落してしまい勝ちである。

動物園に春の遠足に行つた。折から小学校・幼稚園の子ども達で賑やかな入口あたり。

先生はまぎれる子のないよう『お友達と手をつないで！早く歩いて！』順路を進もうとするのだが中々進めないでいるうち、何人かの子どもが花の植えてある所にしゃがみ込んでしまった。『どうしたの？』と見ると『アリンコー！』という答え。それからの先生の対応について詳しく語ることもないけれど、後で園長さんは『動物園にアリンコを見に行つたようでしたな、あはは！ もつともアリンコも動物ですがな』。

自然の中へ大いに入りましょう。殊更遠くへ行かなくとも、身近な所に大きな自然の営みをみつけたいのです。私達大人よりも子どもはみつける目が鋭いようと思われる。見る、きく、さわる、実物で体ごと感じることをらんまんの春、今こそ充分にしたい。

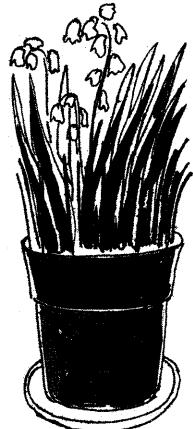
ウィリアム・A・オルコットが「朝の数分で一日の勝負がきまる」と言つてゐるが、その朝の意味を広げて子どもをめぐる大人としての四月のいみを考えたいのである。

(音羽幼稚園)



新しい年度がはじまるにあたつて

村石京



四月、日一日と木樹の緑が色濃くなり、花のつぼみが鮮やかにほころびる季節となりました。昨日まで地面の下で蹲っていた小さな草が、野山に一せいに緑のじゅうたんを敷きはじめ、それを見て冬の間はひつそり静まつ

ていた鳥や虫たちも嬉しげにあちこちに姿を見せはじめます。じつと時をまつて貯えておいたエネルギーを紐といたような自然の営み、身近な動植物の変化に目を見はるような思いもしたりする季節です。

そして四月には、日本においては学校や社会などでも、新しい年度がスタートを切ります。電車の中では、今までの学生服を背広に着替えて緊張した面持ちで通勤するフレッシュマンに出あうのもこの頃です。また、掌中の珠を手離すような思いで三月の卒業期に送り出した

卒園児たちが、一年生になつて真新しい制服制帽に身を固めて晴れやかに幼稚園を訪れたりして、その成長の姿をまぶしいような思いで見つめるのも四月のことです。

さてこの時期、幼稚園の現場の様子はどうでしょ
うか。そして私ども保育者は、どのようなことを心して
いくことが必要なのでしょうか。

その子どもたちを優しく迎えて、暖かく包んであげるの
が、私ども保育者の大きな役割だと思います。幼稚園で
は母親に代る役割をとり、子どもの気持を充分にくみと
り、子どもの望むことを満たすところから先ず出発して
いきたいと思います。

幼稚園は子どもにとって初めての新しい社会であり、
集団生活の場です。しかし集団訓練の場ではありません。
一人ずつの子どもたちが伸びやかに充分に自分を出
して行動し、そして他と円滑な関係をもちながら過ごせ
る場でありたいのです。子どもの夫々が、名前や顔が
違うのと同じく、性格も違うし、発達の程度も違うし、
望んでいることも違います。子どもの個というものを考
えないで、子どもの年令のわくや基準というものに目が
いつてしまふとしたら、ある年令の級といふものは存在
しても、一人一人の個というものはその中では薄れてしま
うでしょう。私たち大人が、一人ずつ全く違った人格
をもつた人間であるのと同じように、子どもも各々が異
なった個性をもつた人間なのです。その一人ずつとの出

○出あいを大切に

新しく入園期を迎えた子どもたちは、今まで生活して
いた家庭の中から、幼稚園という社会へ、集団生活へと
環境が変化します。幼稚園はどんなところだろう、どんな
先生だろう、どんな友だちがいるのかしら、子どもたちの胸の中は、期待と不安で一杯なことだと思います。

あいが、四月に行なわれます。不安と緊張ではりつめでいる子どもの気持を、しっかりと受けとめることからはじめていきたいものです。

元気一ぱいで毬のように弾んでいるA夫、引込思案で気が小さく遊びになかなか入れないB夫、明るく伸び伸びしているけれど落ちつかないC夫、お母さんと離れられないで泣くD子、あれもこれもとやつては次々と放り出している移り気なE子、友だちと遊ぶことが嬉しくてすっかり興奮してしまうF子、用心深くそつと一歩ずつ確めるように行動するG子、級の子どもが三十人いれば三十通り、三十五人の級なら三十五通りの性格をもつた子どもたちがいます。この子どもたち一人一人に合わせた保育をしよう、こんな心から子どもとの出あいの第一歩はふみ出されるのです。自分の考えていることや、求めていることを言葉や行動に現わす子どももいれば、まだ表現しようとしたい子どもも入園当初には見られますが、一人ずつの気持を知り、その望むところを満たしていくことから、子どもと保育者の絆は始まると思いま

す。もし保育者がこの心を忘れて、保育の場において早くから園側の教育目標やねらい等を前面に出すならば、子どもはそれに合わせた行動をとるように要求されるでしょう。園の生活というものには、勿論それなりの規律は必要ですけれど、子どもにとつて多くのことが要求されたり、制約があつたりして、それに合わせていく場なのでなく、自分のやりたいことが出来るところであり、自分の気持が満たされる場であることが基本であります。こういった子どもを中心とした園の生活が約束され、保育者との関係がつくられるならば、子どもは安心して自分の気持を現わし、やがて安定した落ちついた心をもつて伸び伸びと遊んだり、行動したり出来るようになっていくと思います。そしてこうした日々の中では、自ら保育者との間には強い信頼がつくられます。そうした意味で、先ず最初の子どもとの出あいを大切にし、充分に相手を受けとめ、認めていくような関係をつくっていきたいと思います。

一方ではまた、保育者と子どもとの出あいと同じよう

に、子ども同士の出あいも大切なものをもっています。

幼稚園の中でつくられた初めての友だちが、その子にとって一生涯の友だちとなる場合もあります。幼稚園での生活が、いつしか人間同士の絆をつくるものになることもあります。保育者は、はじめは淡い子ども同士の出あいも、次第にそのかかわりを深め、強いものとなつていくことが出来るようになると、常に後循になつて支えながら、子ども同士の関係を大切に育てるようにしたいものです。

○環境づくりを大切に

年度代りには、新入の子どもを迎える級は勿論のことですが、四歳児、五歳児の級でも夫々進級し、子どもも大人も張り切っています。子どもは嬉しく弾んだ心一ぱいでし、保育者としては新年度の抱負や思ひがたくさんに漲つていることと思います。前年度のことをふり返つてみると、四月の思いとは裏腹に実現したことはほんの一にぎりにしか充たない状況にがっかりしてしま

うことも多いのですが、不思議と新しい年度を迎えるときになると、今年こそはという気持が湧いてきて、子どもたちと同じように明るく前向きな心になつてきます。これが学校生活の中における大きなめりはりともいうものなのでしょうか。年度のはじまりとしての四月の月には、自分を見つめなおす機会をもつたり、新しい年度の計画を練つたりしながら、初心に立ちかえる折といきたいものです。

そしてさて、四月の子どもたちを迎える現場は、子どもたちが気持よく楽しく園生活を送ることが出来るようになり、先ず第一によりよい環境づくりをすることから仕事がはじまります。個人個人の小さな名札づくりから、部屋のしつらえ、遊具の配置など全てが子どもを迎えるための大切な環境づくりです。新入や進級を祝うため、明るい雰囲気で暖かく子どもたちを迎える準備をしていくとき、新入の子どもたちがおずおずと母親に手を引かれて来る様子や、あるいは元気よく部屋の入口に入つてくる姿が想像されたりします。そしてまた、年長組にな

つて嬉しくて飛ぶように入つてくる子どもの顔が思い浮かび、こちらも心が弾んでくる思いがしたりします。部屋の中ばかりでなく、園の玄関や園庭などにも春らしい草花を植えたり、小動物を飼つたり、遊具を整えたりして、園全体に新しい年度がはじまる準備をし、子どもたちを迎えるよい保育環境をつくっていくようにしたいものです。

このような目に見えた環境づくりが充分行なわれるとの大きさは、今更いうまでもありませんが、物的環境とともに重要なことは人的環境です。園によつては新しい保育者が加わつて、にぎやかになつたり新鮮になつたり、あるいは多少不安であつたり緊張している場合もあるでしょう。子どもを迎える環境として大切な保育者の役割を思うとき、職員間の人間関係の和もまた、大きな礎となります。夫々が相手の立場を思いやり、相手を尊重しあい、そして各々がよく自己發揮することが出来るような職場環境をつくることにより、保育者の子どもに向ける心も安定し、ゆとりを持つことが出来ると思いま

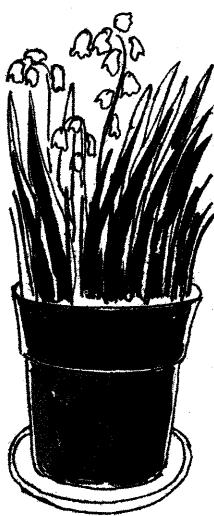
す。ぎくしゃくした人間関係や競い合う気持では、子どもたちの中におだやかな優しい心は育つていかないでしょう。保育者間に相手を認め合う気持や、他を大事にする心があつてこそ、子どもにも映し出されていくものとなると思ひます。お互同士相手をよく理解しあいながら、夫々のもつ良さの中で学びあつて進んでいくような関係でありたいと思ひます。

そしてもう一つ、人的環境として大きな位置づけをとつていくのは、新しい子どもを迎える在園の「子ども」という存在です。一年間あるいは二年間の在園期間によつて、すでに幼稚園の生活環境によくなじみ、友だちとの関係も安定し、規律も身につけられるようになってきた年長児の姿は、新入園児やその母親達に与える影響も大きなものがあります。そして年長児たちが優しく新入園児をいたわり、一緒に遊んでいる姿は、まことに心暖まり、頼もしいものです。先輩としての年長児たちが、自然に新しい仲間を思いやりもつて迎える気持を持てるよう、そしてまた、園の中に流れている文化とい

うものが、今年もまた遊びを通して伝えていくことが出来るようになると、保育者は日常の生活の中で充分な心配りをしていくようにならざるを得ません。

○ゆとりの心を大切に

新入園児を迎えるときには、夢や期待が一杯あります。今年はああもしたい、こうもありたいと思うのですが、その思いが強い程現実との落差に出あって、がつ



かりしたり、落ちこんだり、あせったりする場合があると思います。しかし、新年度の混沌とした状態を抜け切り、安定したものへ移行していくには、子ども自身の成長と、保育者のたゆまない努力と、時間の経過とが、重なりあって成り立っていくものだと思います。日々の積み重ねを大切にしたいものです。自分の思った通りの保育をしようとしても、計画通りの毎日を送ろうとしたのでは、保育者の思いばかりが前面に出て、肝腎の一人一

人の子どもが見えなくなってしまうでしょう。級のまど

まりをあせつたりすることなく、ゆつたりと子どもの成長を見守つていくようにしたいものです。これにはあくまでも、ありのままの子どもを受けとめ、子どもに合わせた保育をするという保育者のおおらかで柔軟な姿勢が基本となります。子ども一人ずつを知り、充分把握し、子どもの伸びる力を支えていく保育をしたいのです。

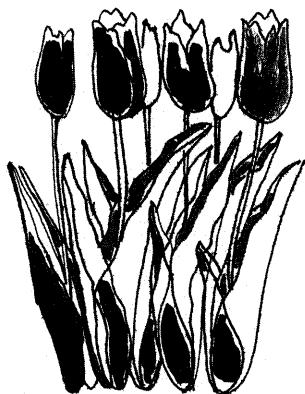
私たちの役割は、子どもが成長していく過程において、一人一人の子どもがよりよく伸びることが出来るよ

うに見守つたり、手助けしたり、支えたりすることにあると思います。教育には「薰陶」という言葉がありますが、保育の成果も一ヶ月や二ヶ月で現われるような単純なものではありません。幼児が人間として育っていく中で、私たちの行なつていったことが、どこかで、何かでその子にとって役立つものがあつたならば嬉しいものだと思います。幼児期というものは、将来の成長の中で長い期間かけて実るもの下地をつくつたり、これから伸びていく芽を大切に育てていく時期なのだと考えており

目の前に見えたことだけで早急に子どもを判断したり、解放したりすることなく、広いやとりの心をもつて暖かく包んでいくようにしたいものです。そして子どものが成長を待つ心を忘れないようにしたいと思います。このような保育者との出あいがあるならば、幼稚園とは子どもにとって本当に楽しい、そして望ましい場となるのではないか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

新入学児と学校



濱 口 紀 恵

小学校入学の前に、ランドセルを貰つてもらったときの喜びと誇りを、大人になつても記憶している方は案外に多いのではないかと思います。毎年四月に入ると、日本中の六歳になつた子どもたちが、数日後にせまつた入学式を楽しみに、ランドセルを意味もなく背負つてみたり、開け閉めしたりしていることでしょう。

と、こんな光景をつい空想してしまうのも、新一年担任と決まつた教師も、桜の花の咲きほころぶにつれて、新入学児同様の落ちつかない気分になつていくものだからでしょう。

新入学児を迎えるための準備のあれこれも、入学式の式次第も、毎年ほぼ同じ、年一回の恒例の行事な訳ですが、まだ見ぬ同士が、一年間いっしょに暮らすという約束のもとに出会う期待と緊張はやはり失われるものではありません。

新一年担任となりますと、春休み中のひとけのない校舎にあつまつて、まず百数十名の児童のクラスわけからはじまって、机やロッカー やくつ箱などに名札をはつて

まわつたり、教室を飾りつけたり、何度となく児童名をよみあげ書き記すそのたびごとに、この子はどんな子だろうかと、繰り返し繰り返し思いながら入学式を迎えるのです。自分がかつて教えた児童の妹や弟が入学してくるとなると、ことさらに可愛く思えて、その児童を担任することになっている同僚に、「どうか宣しく。」と、まるで親類の子どものことでもあるかのようにあいさつしあつたりしています。

まだ産まれる前の子どもの顔かたちやら性格を空想せ

ずにはいられない母親のような思いで、春休みをすごしますので、いよいよ入学式の日、体育館にそろつた子どもたちの前に、担任として立った時には、「これが私のクラスか」と、やっと出会えたという思いになります。さあ、明日から、この子どもたちは、母親が直接には助力できない「学校生活」を、担任を頼りとして「暮らしていく」のです。

子どもらは、「勉強をしている自分」を漠然と想像

し、むづかしい字をスラスラと読んだり書いたりしているイメージに、「もう赤ちゃんじゃないことの確実な証拠」を得た思いで意気揚々と入学してきます。

学校が勉強する場所であるという認識は、全くその通りなのですが、勉強するということの現実は、夢に描いていたような「知識の獲得と、その結果として得る輝かしい賞賛」ではなく、子どもらの想像を超えて多岐にわたる生活全般のいちいちを「自分でやりとげる」しんどさの繰り返しです。

このギャップに、はじめの一週間で、さっそく子どもらは気づき、失望し、混乱します。「先生はちつとも勉強を教えてくれない。」と感じて失望するのであり、良い子になつてみせるぞと決意しているものの、どういう子が良い子なのか、自分にはわかっていないのだと気付きはじめるから混乱を生じるのです。

次に記したのが、入学後一週間の、子どもらの学校生活のあらましです。

第一日目（入学式）

- 自分の席を覚える。

第五日目

- 整列の仕方。

○名前を呼ばれたら、大きな声で返事をする。

第二日目

- よい返事の仕方。

○話のきき方。（最後まで黙ってきく。意見、質問がある時には、手をあげて、順番に話をする。）

第六日目

- 教科書の扱い方。

○校内めぐり。

○ランドセルのロッカーへのしまい方。

- 話のきき方。
- 鉛筆のもち方。

第三日目

○話のきき方。

○学習用具のしまい場所としまい方。

○トイレの使い方。

第四日目

○話のきき方。

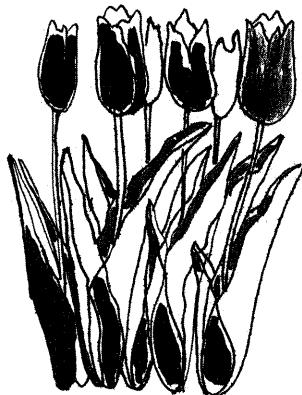
○自己紹介。

○チャイムの合図について。（始業、終業、5分休

み、始業……）

一年生がまず学ばなくてはならないことは、「話を最後まできく。」「順番に話す。」「チャイムの合図に従つて自律的に生活する。」ことです。これらのこととは、幼い子どもたち、それも、「先生にほめてもらいたい」という野心でいっぱいの子どもたちにとっては、とてもむずかしいことです。「よい子になつてみせるぞ。」という決

意にもかかわらず、あるいは決意ゆえに、例えば、ひらがなの書き順を説明している担任にむかって、いきなり、「ぼくね、かけ算知ってるよ。本当だよ。あのね、にいちが2でしょ……。」とやらかして叱られるといった失敗を繰り返すなかで、「ぼくの先生」は「みんなの先生」なのであり、「ぼくの学校」が「みんなの学校」でもある以上、みんなおりあつて暮していくためには、ルールが必要なのだとということを理解していくのです。



小学校は、単に子どもに知識を与える場ではなく、社会性を伸ばすための場所です。知的な面での発達のみを考えれば、能力差のいちじるしい三十人から四十人の子どもをひとまとめにして勉強させることは、何とも非効率的なことです。「覚えさせる」という点においては、家庭教師や小人数制の塾の方が、はるかにすぐれた効果をあげているのではないしょうか。公立小学校が、他の教育産業と全く違うところは、子どもが生きている現

実の生活全体を扱っているということ——子どもらが、他の人間との関係の中で暮らしている、その暮らしを円滑に、自律的に、行うにはどうしたら良いかを学ぶ場であるということになります。

一クラスの中には、必ず「気に入らない奴」の一人や二人はいるでしょう。その時に好きにはなれないまでも、何とか折りあつて暮らしていく方法を考え出さない限り、毎日お互に不快な思いを繰り返してしまいます。また、自分はもう理解できた、先に進みたい……と思つていてる時にも、「待つ」「教える側にまわる」ということが出来なくては、生活が成りたしませんし、逆に、学習が理解できない時に「自分から尋ねる」ことが出来なくては暮らしていけないのが、学校です。

子どもらは、「先生に勉強を教えてもらう」つもりで

入学してきますが、一年間をすぐす間に、「先生がいくとも、子ども同士協力しあつて勉強する」ことを学ぶのです。

四月、五月の頃、子どもらは、自分が次に何をすべきであるかを判断するのは、大人である教師の役目であるといこんでいます。言われたこと以外はしなくともよいと呑気にかまえている、三十数名の子ども一人一人に、次々と指示を出すために、担任は一日中走りまわり、声をからしてすごしています。授業中よりもむしろ、それ以外のこと、給食の仕度や片付け、子ども同士のケンカの仲裁などといったことに労力をとられてクタクタになつてきているのです。終業のチャイムがなるたびに、「先生、トイレにいっていい?」「先生、水のん

でくる」「先生、本よんでもいい」と、細々としたことのいちいちに判断を求める子ども間に取りまかれ、何でこんなことまでいちいち答えなくてはならないのだろうか、幼稚園で集団生活を経験してきたことはいったい何の役に立っているのだろうかと思わされる程、幼い子どもたちです。

子どもらが、教室のそうちをしている様子を記した学級通信（子ども達の学校での様子を、家庭に知らせるために、週一回程度だしているプリントです。）を紹介させていただこうかと思います。5月と9月と12月、一年間に3回、そうちに関する記述がでてくるのですが、これを見ていたら、子どもらの成長ぶりがうかがえるというものです。

（5月28日）

いつも六年生が教室のそうちにしてくれていました。でも、六年生が移動教室にでかけて留守の間は、自分たちでそうちをしなければなりません。みんな大張りきり

…なのですが、何をどうすればよいかわからず、ほうきでゴミをはき終らないうちにぞうきんがけをはじめてしまい、かえってゴミを散らしてしまったり、言われたことを一つやると、あとどうしていいかわからず、「先生、何すればいいの？」といちいち尋ねに来たり…大混乱で、教室のそうちで40分もかかっています。

（9月5日）

きのうから、自分たちで教室のそうちをしています。全員でやっても30分以上かかります。もう少し早く、要領よく出来るようになつたら、給食と同様に、十人ずつのお当番さんにやってもらう予定でいます。

（12月20日）

給食の先生が「4組の子どもたちは、とてもいっしょうけんめいにそうちをしていますね。一年生でも、やらせればこんなにじょうずにそうちができるものなのかな」と、いつも感心してみていきました。」とおっしゃって下さいました。そうちの時間に、わざわざ4組まで来て、子どもたちの前でほめてくださったので、子どもたちの

うれしさもひとしおだったようです。自分たちでそういう事の新鮮さ、誇らしさが段々と失われてきて、「めんどうな仕事」になってしまいます。「めんどうな仕事」でも、にげずにいっしょうけんめいに取り組めば、その努力をちゃんとみていてくれる人がいるのだという事を、この機会に、お家でも話してあげて下さい。

幼児期においても、自分のやりたいことに対しても、主体的に、熱心に取りくむことができるでしょう。

小学校では、自分が今やりたくないことでも、スケジュールにあわせて学習しなくてはなりません。「好き」とか「嫌い」といった感情にありまわされずに学習に「主体的に、熱心に」取り組むことを要求される学校生活は、六歳の子どもにとって、ずいぶんと厳しいものだろうと思います。それでも、喜々として子どもらは学校にやつてきます。少しくらいの熱なら親を説きふせて登校してしまいます。何でそんなに学校が好きなのかと、不思議に思われる程です。あるいは、好きなのでは

なく、「もつともっと良い子になりたい」がためなのかかもしれません。子どもらが学校に寄せる信頼と期待の大ささに比べて教師個人のもっている力の何と小さいことでしょう。それでも、平然と教師でいられるのはどんな問題も担任と子どもらと、学級全体で答えていけば良いのが小学校という場所であるからです。

「みんな、ひとりひとり違うんだよ。でも、いっしょに暮らしていくよ。」

（練馬区立田柄第二小学校）

南の島の子どもたち(1)

——オープンな縦わり的保育が
もたらしたもの——

浅野 恵美子

ここ沖縄は「南の島」という言葉が似合わなくなつたと思う。一日に何本もの東京往復便が飛び、朝早く家を出て、東京での会議に参加し、夜帰つてくることも可能である。そして、沖縄も又、他府県同様に情報化社会といふ巨大な船に乗つてしまつていて、本土復帰によつて、地域性を許容しない天下り的といわれる行政もしつつ

かり入りこみ、沖縄らしさは失われつつあるのが現実だ。それでも、それだからとすべきか、沖縄らしさを求める動きは根強く、独特な文化的雰囲気は維持されている。

激しく変動する日本の中では、沖縄らしさはどう生き残ることができるのか。そんな思いをいだきながら、沖

縄で保育者養成にかかわっている視座から、沖縄の親、子、保育者たちの話題を搜しつつ、子どもが育つということについて思いをめぐらしてみたい。

今回は、昨年十二月、沖縄県保母の会研究集会で発表された実践を紹介する。これは、沖縄本島北部の中心地、自然の豊かな名護市の120名規模（〇歳—四歳）の公立保育所での出来事である。

◎ドラマのはじまり—三歳児の部屋が暗くてかわいそう
1986年、4月、新しくM保育園に転勤してきたI所長は、三歳児の部屋が二歳と四歳のクラスの壁にはさまれて、高い窓一つだけの部屋で、一日中、暗いことがになり、三歳児クラスの壁を取払うことを提案した。

それまで、クラス中心の保育をしていた二歳児、四歳児の保母は、拒絶反応を示したが、自分たちだけ良ければいいのかと言われると返す言葉はなく、やってみるしかないということになった。

壁は取り払われ、ロッカーや箪笥で簡単に仕切っての

保育が始まった。予想通り三歳児の部屋は、ぐーんと明るくなり、風どおしも良くなつた。又、三クラスを一望に見渡すことができるようになり、部屋がひろく感じられた。部屋がオープンになると、隣の部屋を自由に見ることが出来、行き来もできるようになった。異年齢間の子どもどうしが、自然に触れあい、子どもたちは、保育所全体をわがもの顔に飛びまわるようになった。

予想と違つことは、騒音がさほど変わらなかつたこと。少しばかり騒々しい保育にはなつたが、隣のクラスが良く見え、子どもの興味を引くことには、いつでも合流したため、騒音と感じることはなかつたという。むしろ、保母どうしもおたがいの状態が良くわかり、声を掛け合う関係が育つていった。

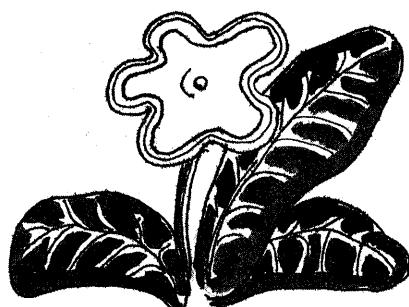
◎「かばまだら」騒動

そんなオープンな環境の中、二歳児の保母のS先生は、かばまだら（沖縄に住むちょうちょ）を4、5匹観察ケースにいれて研究のつもりで観察していた。かばま

だらは、「とうわた」の葉しか食べないという。ロッカーの高い所に置き、時々のぞいて葉っぱの食べ具合を見たりしていた。かばまだらは、さなぎになり、5日目には、ちょうどになつたようだ。虫に弱い保母も一緒にこわごわのぞき、ちょうどになるのをみとどけ保母たちは満足していた。

そんな折、「センセイ、ミテミテ！」と大声を上げて外から駆けてきたのは、二歳の男の子であった。なんと宝ものでもみつけたかのように、掌に幼虫をのせ、目をキラキラさせて興奮していた。とうわたの葉から幼虫を見つけてきたのである。他の子もかけより、普段であれば触ってつぶすところを大事そうに皆でのぞきこんだ。

二歳児の興奮は、すぐ隣の三歳児へ伝染し、三歳児は、二歳児の虫を腕力でとりあげて見た。そして、自分達も幼虫を集めてきた。興奮は、翌日には、四歳児に広がった。行動力のある四歳児は、百匹、二百匹、数えることができないくらいにかばまだらの幼虫を集めてきて保母を仰天させた。虫さわぎは乳児にも伝わった。年長



の部屋にやつてきて、観察の箱の幼虫に手を突っ込むの

で、さわらせないように見張り番まで出てきたという。

こうして、どのクラスも保母が誘導したわけでもないのに「かばまだら」に夢中になった。子どもたちが、かばまだらが蝶になって飛び立つのを見たのはいうまでもない。「オカアサン、カバマダラ、ソラニトンディイッタヨ」、「オオゾラガトベティイナ」、「イイキモチダロウナ」と空にとびゆく蝶への感動は子どもたちの心にきぎみこまれた。子どもたちは、卒園した後も、かばまだらのことを「ガッコウノチヨウチヨ」と親しんでいると言う。

◎響きあう子どもたち、保母たち、親たち

オープンな関係は、その他にもたくさんなドラマを生んだ。保母どうしが開かれた関係になるにつれて、親たちとの関係も開かれたものに変化していった。自分が担任ではない親や子にも、気軽に声をかけ、親しく談笑するものが増えた。120名の子どもたち一人ひとりに十三

人の保母の暖かい目が注がれ、広がつていった。

運動会は、異年齢でできてきたつながりを活かしたものにしようということになった。全体集団でとりくめ、多くの遊びを入れることができ、地域とも関わっていけるものということで「かえるのつなひき」が選ばれた。

運動会実行委員会が作られ、保護者にも「かえるのつなひき」の絵本の読み聞かせをしてもらい、日々の保育の中で、どんな内容、演出が可能か模索した。しかし、うまい方向がみつからず、保母たちはおちこんでいたという。そんな中、子どもたちは、「ヤッスイ、ヤッスイ」と掛け声をたのしみ、「カエルノツナヒキヨーヨイ」と口ずさんでいた。保母は、これは、歌にできそうだということでピアノの前にすわり、保母どうし、知恵をだしあい、とうとうM保育所のオリジナル曲「かえるのつなひき」ができたのであった。それからは、準備はスムーズに流れて、遊びながら、その日の為に備えていった。親たちには、運動会というものの意義とねらいを考えさせるプリントをくばり、参加の体制を作つて準備し

た。

そして、子も親も保母も一緒に遊び、燃える運動会は、大成功に終わった。園児席というものを無くし、親の側から自分の出番に励まされて出、もどるとうんと褒めてもらい、親も子も満足だったそうだ。反省会も、自然に親も残ってくれて、感想を出してくれ、保母たちもうんと褒められ満足だったそうだ。

M保育所は、地域の中に子どもの遊び場を開拓し、広げる一方で、「遊びの時を捉えた保育」「遊びの時をつくる保育」の伝統のようなものを育てたのである。

保母たちは、偶然の出来事を大切にし、子どもの変化に注意し、遊びを演出し、自ら遊び楽しんでいる。遊びが、子どもらの生命を躍動させている。遊びは、子どもの中にある、とどまるごとを知らないわきいづる泉のようである。

女性だけの職場は、何かと人間関係でのトラブルがつきものである。それを避けようとしてクラス主義に陥ることもあるだろう。M保育所の保母たちは、自分は、保育者として能力はあるのか、無いのかという張り合いの緊張感から開放された。集団の中で、周りから自分の保育を見てもらえることは、気を使うことではなく、見てもらえる喜びであることを知った。自分の持味を捜し、それを全体の中へ活かそうという熱気が感じられる。勿論、仲間の変化にも驚きあい、その良いところをみつけあう雰囲気も育てている。オープンな保育は、そのような保母たちのチームワークがあつて成功したのだ。おま

◎オープンな関係が成功したわけ

沖縄は、もともと南国で暖かく、家のつくりも人間関

つり好きのウチナーンチュ（沖縄人）の心に合致したのかも知れない。

M保育所の体験は、私たちの暮らしの中にも、いつの間にか閉じた関係ができるて、交流の機会と楽しがが失われていることを思わせる。個我をしつかり育て、かつ個我を乗り越えて人格性を自覚した人間を保育集団はどう育てることができるのか。M保育所の保母たちは、少なくとも一つの回答を見つけたと思う。それは、補い合いつつ、一緒に保育を作り、自分の責任を果たし、それぞれに成長するというやり方である。

ハイテク時代に突入した分、人々が社会の巨大な動きに気をとられ、それとの関係にふりまわされ孤立して自分を見失いつつある今、沖縄の保育所（園）は、地域文化の創造の重要なない手になりつつある。保育園は、親たち、子どもたち、保母たちのいきいきした出会いのある楽しいところである。

子どもたちは、放っておいてもハイテク社会に順応していくだろう。子ども時代に十分に遊び、社会性、現実性、集団性を学ぶ機会に恵まれた子どもたちは、様々な困難をのりこえていく力、人間としての幸福をつかみとる力を育てたのだと思えるのである。

（沖縄キリスト教短期大学）

ハイテク時代に突入した分、人々が社会の巨大な動きに気をとられ、それとの関係にふりまわされ孤立して自分を見失いつつある今、沖縄の保育所（園）は、地域文化の創造の重要なない手になりつつある。保育園は、親たち、子どもたち、保母たちのいきいきした出会いのある楽しいところである。

沖縄の保育園は、商業ベースでの教育産業的な色彩を

時には茶碗やお皿や調味料の用意など、テーブルの準備をやってのける小さなメイドさん のようです。

お母さんは一つ一つのことを特に教え込んできたわけ

ではないのですが、気がついた時には必ずい 分役に立つ子になっていたということです。その彼女が年長さんになつてから時々おねしょをするようになり、最近では昼間も失敗することがあって心配になり、相談室を訪れました。

○多忙を極めるお母さん

桃子さんのお母さんは多才な人で忙しく活躍し、1日が48時間あつたらよいのにといつも言っています。桃子さんが生まれた年だけ出品を断念した展覧会では、毎年良い成績で入選し、お母さんの生きがいの一つです。また手先が器用で自分の洋服を高校時代から作り始め、今では桃子さんのものも含めて洋服は全部手作りです。

お父さんは技術者でよく外国へ出かけ、長い時は1年位帰って来ません。そんなこともあってお母さんは二年

前から趣味と実益を兼ねて小さな手芸店を始め、ますます忙しくなりました。

○小さい時から自立心を

忙しいお母さんは、こどもは一人と決めており、小さい時から自分のことは自分でするということを大事に桃子さんを育ててきました。というのも自分は四人きょうだいの末っ子で上の二人が病弱だったために、母親が上の二人にかかりきりで、その分下の二人は自由に育てられました。そのためか下の二人は上二人への手のかけ方に批判的で、ああいう親にはならないという信念をこども心中に抱いて成長したということです。ですからこのお母さんの桃子さんへの授乳も、トップターの中で哺乳びんをタオルで支えてのものでした。またこどもといえども親とは独立の人格をもつた個人であるとのことから、彼女が言葉を使い始めた時、マンマ、ブーブー、ワンワンといった幼児語を周囲の大 人まで同調することはないと考えました。むしろ言葉を覚える大事な時期なので、正

しい日本語を使ってモデルを示すべきであるとのことでした。が、一方では自分が彼女に用を頼む時は、どんなに彼女が幼い時でも、「お願い」と「ありがとう」を必ず言つたといいます。また彼女が遊びに夢中になつてトイレが間にあわなかつた時など叱らないようにしました。このことに関しては自分が小さい時、母親が子どもは失敗をくり返しながら大きくなつていくものだといって叱らない人だったことを見習つたということです。違うことというと、叱りはしないけれどもパンツのはきかえは自分でというのがこのお母さんのしつけでした。

○やつぱり一度は甘えてみたい

不憫で、今から思うと度を越して彼女を甘やかしてしまつたようでした。洋服の着脱から入浴、食事のすべてにまるで赤ちゃんを預つたかのようでした。お母さんにあまり抱かれたことのない彼女は湯舟の中でまで抱いてくれるおばあちゃんにすっかり甘え、お見舞いに現われた彼女を見て、お母さんはあわてておばあちゃんに「あまり甘やかさないで」と頼んだほどでした。

大手術の後なのでお母さんが退院してもしばらくの間はおばあちゃんの家にいましたが、そろそろ幼稚園が始まる準備があるからと、三月下旬桃子さんは久しぶりに我が家に戻りました。が自分が生まれ育つた家が彼女にはまるで別世界に映つたのでしょうか。間もなくおねしょが始つたのです。

桃子さんはこうしたお母さんのやり方に早くから慣れ、それが当たり前としてやつてきました。ところが去年

の暮、お母さんにガンが発見され、急いで手術をすることがなつたのです。それで新年早々から約二か月半、彼女はお母さんの実家に預けられました。おじいさんおば

あさんはお母さんの病気も心配ですが、幼い桃子さんが

事例二 こどもさえいなければ

——交通事故で逝つたお父さんを恨むお母さん——

花子さんは小学校5年生ですが、去年の10月からずつ

と学校へ行つていません。学校へ行かないだけでなく、家から一歩も外に出ずベランダの洗濯物すら取り込もうとしません。そして気に入らないことがあると弟をいじめたり、手当り次第に物を投げとばすので家中は襖が

破れたり、食器戸棚のガラスが割れたりでたいへんです。

○こどもと背中で話をてきたお母さん

花子さんのお父さんは彼女が四歳半の時交通事故で亡くなり、今はお母さんと弟との三人家族です。お母さんはずっと公務員として共働きでやってきましたが、彼女たちが小さい時は保育園から二人を引き取って、夜寝かせつけるまでの何時間かはまるで戦場のような忙しさでした。お父さんがいる時は二人の面倒を見てもらうことが出来たのですが、テレビを子守りにお母さんは食事の仕度と洗濯と部屋の片付けに大奮闘でした。ですから、こどもたちが何か話しかけてきても、生返事をしていたり、保育園であったことを自分からゆっくり聞いてあげ

た記憶がほとんどないということです。いつも背中で聞いているか呼ばれても「あとで」と言つてそのままになつてしまることが多かつたようでした。

○肩身の狭い思いをさせたくない

——無理をしてでも外出するお母さん——

お父さんが亡くなつてから、お母さんが一番心を碎いたことは、片親だからとこどもたちに肩身の狭い思いをさせたくないということでした。ですから本当は週末は家について普段手がまわらないでいる掃除や片付けをしたのですが、そこを我慢して土曜、日曜は必ず出掛るよう心がけました。お天気のよい日は遊園地やハイキングに、時にはお友だちの家庭と誘いあって泊りがけの旅行をし、「お父さん」の味を味わせようとしたりしました。雨や雪の日でも映画や展覧会や友だちのピアノの発表会等と、行事には事欠きませんでした。多い時には二つ三つと重なつて、時計を見ながら会場を移動することもしばしばでした。

もともとあまり社交的ではない花子さんにとって、こ

うした週末の過ごし方は大きくなるにつれて負担に思わ

れ出したのですが、お母さんは外出することこそ、こど

もとの心の触れあいと信じて、彼女の気持など解さない

ようでした。

○罰で懲らしめるお母さん

ずっと以前、まだ3年生位の時、花子さんは一度日曜日の外出を「行きたくない」と行かなかつたことがありました。その時は彼女を一人置いていくのは心配だし、

先方とは約束があるしで迷つた揚句、彼女を置いて出かけました。お母さんの気持として、こんなに忙しい思いをして出掛けるのは、そもそもはこどもたちのためを思つてのことという思いがあるので、実に腹立しい出来事でした。そこで出掛けるに当つてお釜の中のご飯を残らずおにぎりにして、全部持つて出てしましました。こうすればきっとお腹がすいて二度と行きたくないとは言わないだろうと思ったのですが、実際には花子さんはます

ます外出したがらなくなつていきました。

○いつも怒り、人を許さないお母さん

このお母さんの不幸の始まりは、お父さんが二人のこどもを残して死んでしまつた事にありました。ですから早くこどもが大きくなつて一人前になつてほしいといふ想いと、離婚していく親たちへの激しい怒りがいつもお母さんの心中を占めていました。私はお父さんと別れたくて別れたんじゃない。それなのに自分たちの意志で別れるなんてぜいたくだと言うのです。

早く一人前にというのは、このお母さんの場合一人で苦労を背負されていることへの怒りでした。ですから花子さんが学童保育を卒業して4年生になると学校から帰つた彼女に、夕食のお米をといでスイッチを入れておくことと、洗濯物の取り込みとお風呂の掃除を言いつけました。自分たちがこどもの頃はこの位の用事は皆やつていたという想いがあるので、お母さんは花子さんに一度に三つの仕事を言いつけたことのたいへんさを考えたこ

とはありませんでした。むしろ言われてやるのではなく

4年生にもなつたら、自分から勧んでやつて当り前なのに、という気持の方が優先していようです。たまたま帰宅した時にお風呂の掃除がしていなかつたり、取り込んだまま散らかっている洗濯物を見ると、ついカツとなつて彼女の怠慢をなじるのでした。

彼女が登校しなくなつたある日、担任の先生が家庭を訪ねた時、誰もいない家でひとりマンガを見ていた彼女がうれしそうに言つた言葉が印象的だつたと報告してくれたことがありました。「先生、きょうはとつてもうれしいんだ。だつてきょうはお母さんお米をといでおかなくていいって言つたんだ。ボーナスが出るから皆でお寿司を食べに行くんだつて」とのこと。この言葉で担任の

先生は彼女にとつて家事の分担がいかにきついかを察して、早速お母さんと話し合つたのですが、「近ごろの親はこどもに手伝いをさせなすぎるから、私が鬼婆みたいで」と逆に抗議されてしまつたそうです。

○友だちの失敗を許せない子に

学校へ行こうとしないばかりか、夜と昼がひつくり返つて一日中テレビばかり見ている花子を見て、お母さんは自分が忙しかつた時、テレビに子守りをしてもらつたことはすっかり忘れて腹を立て、テレビを粗大ゴミで捨ててしましました。前述の兵糧攻めと同じでテレビさえなくなれば夜更かしをしないだろうと考えてのことでしたが、これも結果は逆で彼女をますます依怙地にしてしまいました。

こうしたお母さんのやり方は、他人の目に止まる以上に、日常のちょっととした親子のやりとりの中に頻繁につたと思われます。というのは彼女がまだ登校していた頃の事です。彼女の学級では日直さんの仕事に忘れ物調べがありました。彼女が日直の日、先生の所に「名簿を1枚下さい」と来たので何に使うのかと思いつつ渡したところ、一人一人の欄に忘れ物なしとか○○と記入し、忘れ物をした人に罰としてきょうの帰り掃除をさせたらどうかと言つてきたとのことです。先生もこの徹底した

やり方に感心する前に、人を許さない厳しさにびっくりし、彼女の将来を心配していた矢先に登校拒否が始まつたということでした。

相談担当者の目

——母親が働くということと、こどものしあわせとは――

以上二つの事例はいずれもフルタイムの仕事をもつ母親の例です。二人のお母さんは全くタイプが異なるので一緒に論じられる部分は少ないかもしませんが、長い間こどもたちの心の相談室で仕事をしてて感ずることは、最近の母親たちの子育て觀が急速に、かつ大きく変貌しつつあるのではないか、ということです。

つい10年位まではパートタイムの仕事に出る母親の数も今ほどではなく、始めるとしても子育ての第一段階である幼児期は家庭にいて、下の子が小学校に入ったのを機に、という例が多かったように思われます。その頃の私たち相談担当者の悩みの多くは、核家族化、少子化が

進む中での、親の“過保護”、“過干渉”対策だったよう思います。ところが近年は結婚、出産を経てなおフルタイムで活躍する母親たちが増え、子育ては自分の仕事の“一部分”にすぎなくなりつつあるようと思われます。その結果こどもへの関心の薄い親、（放任とも異なる）、ポルトマンによると100%親に依存していると言われる乳児期の親子関係さえも非常に希薄な関係へと移行しつつあるよう思われる昨今です。その一例が事例1の桃子さんの母親です。このお母さんは芸術家だけあって非常に感度のよい人で、こどもが求めているものは的確に把握していましたが、自分の生活が忙しすぎて、こどもに手を貸したり、世話ををするゆとりがありませんでした。そしてお母さんの揚げている理屈は一々がもつともで、反論の余地のないものでしたが、桃子さんのおねしょをきっかけに、合理的ということだけではこどもは人間として成長し得えないことをお互いに学びあいました。結局はこどもが生まれたことによって、自分の生活のベースを乱されるのがこわくて、こども中心の生活を

否定していた自分に気づいたようでした。そして、「う

ちの場合はこどもが爪先立ちをしても応じきれないほど
の背伸びを要求してきたんですね。」と反省し、「小学校
入学前に気づいて本当によかったです」と、桃子
さんのおねしょの意味を理解したようでした。

花子さんのお母さんの場合は、花子さんの登校拒否の
意味を理解するのはむずかしく、今だに自分の生き方が
影響していることは及びもつかない状態です。相談担当

者としてそれを指摘することも可能ですが、それではこ
のお母さんが花子さんにしていることと同じことをくり
返すだけのように思われます。この花子さん親子に必要
なのは、お互いに自分の運命を受け入れて、失敗をした
りやろうと思つても出来ないことを大らかに受けとめ、
許しあう体験ではないかという気がします。それにはま
ずお母さん自身、片親で奮闘してきたその頑張りを誰か
に認められ、人を許しあう喜びを経験することではない
かとのことで、今のところはお母さんを支えることが主

体になっています。

花子さん自身に対しては、学校へ行かないのではなく
く、行けない状態にある彼女を誰も非難しないし、罰も
与えないことが当面の目標かと思われます。誰からも自
分の存在を脅やかされないんだという安心感を彼女自身
が抱くまで、そつと見守つていることが、いつの日か彼
女自身で動き出す時へ導いてくれると考えられるからで
す。

近年女性の高学歴が進み、有能な女性が結婚後も社会
へ進出して活躍することは、同性としてこの上ない喜び
であります。しかし、その一方で母親たちの繁栄の影に
こどもたちの不幸という産物がもたらされる危険はない
か。心を病んだこどもたちとの毎日の中で、幸せな思い
出に残ることも時代とは、ということを考えさせられて
いる昨今です。

(東京都立教育研究所)

若いお母さんたちへ

娘と共に暮らす中で

はるにれの会
向山陽子



○みんな一緒に正月

娘みづきは五歳になりました。ついこのあいだ入園式
だと思ったのに、もうすぐ年長組です。娘と一緒にすごす
時間の中で、考えさせられたことを書いてみます。

昨年の暮、主人が休みになるとすぐ、家族三人で東海
道を車でつっ走り、明石の私の両親のもとにいきました。
た。毎年、暮かお正月には、弟の家族も含めて、全員集
合して写真撮影とあいなるのですが、今年は、弟家族は
アメリカ滞在となり、寂しいだろうからと、夫の思いや
りを感じながら、大掃除もそこそこでかけました。

暮の三十日には向山の両親宅へ帰り、三十一日からは向山家全員七人で、群馬県四万温泉へ。向山家としても、家以外の場所でのはじめての年越となりました。

若輩の我家としても、又、まだ年少の娘にしましても贅沢すぎるのは百も承知の温泉での年越でした。

向山の男性達は、皆、酒をよく呑みます。お正月は、

朝から晩まで、呑んで、遊んですこします。結局、女達は、立ち働きます。もちろん、おせち料理も、全て手づくり。親戚の、親を亡くした私達の世代の者が、お正月の寂しいのが辛いと、子どもを連れてやつてくると、おじいちゃん、おばあちゃんの味を知らないからと、本当によくしてあげる両親と祖母です。

三が日がすぎ、私達も自分の家にひきあげ、会社や学校が始まり、女正月といわれる小正月の頃には、母も祖母も、風邪をひいて寝こむのがここ数年の常でした。腰を痛めている祖母は、休んでいてと言つても、立ち働きます。

その祖母のことを思つて、母が温泉での年越を言い出

し、その母のことを思つて父が乗り気になり、暮の大掃除には、この計画が実行できるようにと一番よく働いたといいます。祖母こと『ひいばあ』は、秋口から健康したことのほか注意していました。

私達がこの計画に参加するかどうかは、なかなか決心がつきませんでした。

結婚してから十二年、娘のみづきの出産直後を除いて毎年、年越は、向山の両親の家でした。この機会に、我家三人だけの年越を、我家で経験するのもいいとも考えました。お正月の温泉行は出費も大変です。

しかし、ある時、ひいばあが言いました。「おばあちゃんとおじいちゃんと三人で温泉に入ってきたけど、三人とも口を開くと、みづきも連れてきたいね。みづき、みづきなんだよ。」と。

そう、向山家全員が揃つてこそお正月なのです。

全員揃つて、今年もよろしくと、新年の挨拶をしなくては一年がはじまりません。

そして、一人きりの孫、みづきの存在は向山家にとつ

てなくてはならないものになっています。

平素は別に暮らしていて、月に二、三日しか行かないけれど、みづきが存在しているというだけで、生命とか未来に勇気づけられ、明日を生きる希望になっているようです。

私達夫婦にして然り。父母、祖母にしてはなおさらでしょう。

こうして、皆で温泉に入り、花札、百人一首、ゲームに明け暮れ、着物を着て皆で山の向こうまで歩いて初詣でに行き、ごちそうを鱈腹食べて、贅沢な年越をするごととあいなりました。

あちこちで「仲がいいねエ」と声をかけられ、ひいばあから孫まで七人は、増々気をよくして、ニコニコと微笑んでおりました。

私にしてみると、やっと「家族」というものがわかりかけ、皆がニコニコしていることが、私にとっても幸せなのだと、思えるようになった、少し成長できたお正月でした。

○「キモチガワルイ」

暮の明石でこんなことがありました。私の両親も、みづきが行くと大騒ぎです。みづき用のプレゼントを入れる箱が用意されており、日頃から、みづきが来たらと子どもが喜びそうな物を貯めておくようです。みづきも、明石ばあばに、お手玉や、あやとりを教えてもらおう、

明石じいじには戦争のおはなしをしてもらおう（夏休みに「じいじ、戦争行ったの？　おはなしして？」と、突然尋ね、父は何と話せばよいのかとまどい、「今度来るまでに、みづきに話せるように考えておくね。」と約束しました。）と、何日も前から楽しみにしていました。

みづきはプレゼントをもらい、大喜びし、おじいちゃんも、おばあちゃんも嬉しくて、みづきを抱っこしようとして、スルッとぬけて私の所へきます。頬がふれるほど近づくと、サッと私の所へきます。「どうしたの？」ときくと、小さな声で「キモチガワルイ」と言いました。

のです。

確かに、四ヶ月ぶりに会う父と母は、会うたびに、老いが目につくようになつてきました。しかし、月に一、二度会つてゐる向山の父、母、祖母には、決して出でこない言葉です。

「一緒に暮らす」とは、こういう事か、と深く考えさせられた出来事でした。

もちろん、帰る頃には、抱っこもさせるようになりますが、見送る寂しそうな父母を見ながら、又、みづきを連れてきてやらなくては、と思うのでした。そして、みづきのおかあさんの小さかった頃の思い出を話したい。

その中で出てくる、おかあさんのおかあさん＝明石ばあばのはなしもしたいと思うのでした。

○「明石ばあばのおかあさんはどうしたの」

その1

ある日、台所で一緒にじやがいもの皮をむいている

と、突然、みづきがききました。

「ねえ、みづきのおかあさんは、明石ばあばでしょ。明石ばあばのおかあさんは、どうしたの？」

「オット……おちついて、おちついて……」

「ウーントネ、明石ばあばのおかあさんはとてもよく生きて（ナント不自然ナ表現！）八十三歳でなくなつて、今は土にもどつて、お星さまになつて（土ニナッタノ？ 星ニナッタノ？ ドッヂナノ？）みづきや、おかあさんを見ててくれるよ。」

「フーン、明石ばあばも、八十三歳になつたら死ぬの？」

「ウーン、もつと生きるかもしねえね。明石ばあばが八十三歳だと、おかあさんは六十歳位かナ？」
「エー、おかあさん、おばあちゃんになつたらイヤダメー」と泣き出したのです。

その2

その数日後、静かだなど、のぞいてみるとシクシク泣

いています。

「どうしたの？」

「おかあさんも、おばあちゃんになつたら死んじやうの？ 死なないで！」 みづき、一人ぼっちになつちゃう。」 と言ふと、ワッと泣き伏して、私の胸に顔を埋めました。

「そうね、おばあさんになつたら、いつかは、お星さまになれるかな。みづきは、大きくなつて、大好きな人と一緒に暮らしていいのよ。赤ちゃんが産まれれば、一人ぼつちじゃないよ。おかあさんも、明石ばあばとは一緒にお暮らしてはいいでしょ。大好きな、おとうさんとみづきと暮らしていいるでしょ。」

「いやだ、みづき、ずっとおかあさんと一緒にいい。」と泣き出しました。

その3

涙をためた目でじっと私を見つめて、
「みづきも、死ぬの？」

「そうね、ひいばあだつて、たくさん生きてるけど、ま

だまだ生きるでしょう。伊那のおばあちゃんだつて八十八まで生きたでしょ。たくさんたくさん生きて、一生懸命生きて、それからいいんじゃない？」

「ウン、わかった。みづきね、百よりもっともっと一生懸命生きる。おかあさんも一緒にね。いい？」一緒に、百も二百も無限大も生きるんだよ。ね。」と、明かるく、真剣に念をおされて、

「そうね……たくさんたくさん、一生懸命生きてれば、土に帰りたくなるかもしれないね。」

「お星さまになるの？」

「うん、一生懸命生きて、他人に優しくできた人はね。」と言つてから、

「順番があるのよ。みづきは、まだ五歳しか生きてないから、まだまだよ。みづきが死んだら、おかあさんも、おとうさんも、じいじやばあばも悲しくて心がぶれちゃうからね。」とつけ加えずにはいられませんでした。

2・3は、冬休みに入つてすぐ、伊那の遠縁の方のお葬式に参列した後の、みづきと私の会話です。昔ながら

のお葬式で、詳しくはここでは述べられませんが、他人に優しく、一生懸命働いて八十八まで生きた、伊那のおばあちゃんは、澄んだ空氣、山に囲まれて、『土に還った』と自然に思えました。帰路、「おばあちゃんの星、あれ?」と、星空を指さしたみづきでした。

今までも、飼っていた犬や、猫の死に会つたり、痛ましいニュースに、「この子、どうしたの?」と、聞きにくる娘でした。

昨年の夏も、原爆を扱った絵本『おこりじぞう』や、戦争を扱ったアニメ『チロൺヌップのきつね』を観て、「戦争ってやだね。兵隊さんがこなかつたらコロも死ななくてよかったです。」「兵隊さんも、戦争がなかつたら、やさしいおじさんなのにね。」と、私がびっくりするような感想を言いました。日頃の一人遊びの時に、『死』や『戦争』は、娘の口からよく出てきます。

クリスマスには、幼稚園での聖劇(ページェント)で、天使になり、神さまを身近に思う時を持った娘です。

この冬、私は、娘の心が奥深くなっていく過程を、身近に感じることができました。

一人で、小さな心で、思いめぐらしている娘を知りました。

そんな娘が、いとおしくなります。と同時に、私自身が、私的人生を、真剣に生きて、娘にきかれた時、真剣に、娘に向きあえなくてはと思った冬でした。

親や、周りの大人が真剣に向きあって話してくれた話は、幼い時の事でも、しっかりと心に住みついて、困った時、苦しい時に、思い出し、勇気づけられた経験は、誰にもあるでしょう。話の中身は忘れても、真剣に向きあってくれた大人の姿は、目は、私の人生を勇気づけ、励ましてくれています。

『幼児期とは、この人生、生きるに値すると、思えるかどうかの、人生の根っこ』

この言葉を、かみしめています。

○歩くこと

我家は、西武池袋線、新宿線の三つの駅の中心点にあり、どの駅からも歩いて15～20分かかります。そのかわり、静かで、鳥の声や風の音、木々のざわめきで、目が覚めます。(もともとこの十年で、緑は半減しましたが)

幸か不幸か、私が自転車に乗れるようになったのは、娘が二歳八ヶ月の時でしたので、"歩く"ことには、何の不便も感じず、道々遊びながら、三十分かかるとすぐそこへ行ったり、一時間かかる駅まで歩くことも、苦ではなく、むしろ楽しい時間でした。"歩く"ことの成果は、目に見えない所で、娘の心身に、積み重なってくれました。

体が丈夫。今、片道、二十分の通園も、登園は毎日歩いています。自転車の荷台で、モコモコに着ぶくれながら登園する子に比べると、娘の何と身軽なこと。家を出

る時着るベストも、五分と歩かないうちに脱いでしまいます。病気もせず、有難く思っています。

歩き方が上手で、速くなりました。足の出し方や、障害物、車に対しての身のこなし、判断力など、積み重ねてしか身につかないものです。

歩く楽しみを知っています。道端の草花や、石や、今なら霜柱に目を止め、立ち止り、拾い、幼稚園までとけないようを持っていくにはと頭をひねり……自転車の荷台で荷物のように運ばれるのと比べ、何十倍も、人間らしい営みをしているようです。

そして、私との何にもわざわざされない、二人きりの時間が持てます。

先日「みづき、帰りも毎日歩こうかな。だって、楽しんだもん。」と言いました。

幼い時からよく歩いていたとはいって、二十分の徒歩通園を母子とも今のように楽しめるようになったのは、二期、運動会の頃からでした。

私には“信念”めいたものもあり、徒歩通園と決めていましたし、二十分の距離は、娘にとつては“遠い”ものではないと思っていましたが、その信念が邪魔をして、一学期の半ば頃、疲れがたまってきている娘の、心に寄りそなことを忘れて、歩かねばならないと思わせてしまったこともありました。

そんな時、後から追い越していく自転車に乗った友達を、娘はどんなに羨しく思つたことでしょう。

「〇〇ちゃんはずるい。自転車に乗つてずるい。」と怒りました。まだまだ、先に着くのが良いという価値感がまかり通つている子ども達でした。

「そうね。〇〇ちゃんは小さい時からあまり歩いてないからね。みづきは、よく歩けるしね。」と、答えるのが精一杯でした。

「今日は、みづきも疲れているようだから特別サービスで、お地蔵様まで自転車で行こう。」といった朝の、娘の嬉しそうな顔を忘ることはできません。

二学期になると、走りたくなり、私が追いつけないで

いると、「おかあさん、自転車に乗つていいよ。みづき、走るから。」と言ふようになりました。

私にとつては送つた帰りも自転車で帰つてこられるところが……毎日、手をつないで登園していたので、

手をつながないと、何とも寂しいのです。娘にとつて、はじめての運動会が近づいてきて娘なりの緊張が高まつてきた頃「走る」と言わなくなりました。久しぶりに二人で歩いた朝の気持ちがおちついたこと。やっぱり、私が片手で自転車を転がすのも止めようと思つました。だけが自転車を転がすのも止めようと思つました。

私が片手で自転車を転がし、片手で娘と手をつないでも、それでは、自転車本位の速さになつて、娘の心の速度、「あっ」と何かに気づき、立ち止まり、坐りこみ……には寄りそつてやれないので。

金木犀の花を拾いながら登園するようになつた頃から、徒歩通園が、本当に楽しめるようになりました。毎朝、道には何かしら花がおちていて、先生へのおみやげがいっぱいになります。花が、風に舞う落葉になり、葉

つばのお面になり、今では霜柱です。

サックサックと霜柱を踏む娘の姿が、私の幼い頃の思い出と重なります。

「おかあさん、白い影だよ。」

「えっ？」と娘の見やる方を見ると、本当です。陽の光に、霜がとけて、黒く広がっている畑に、家並の影の部分だけが、まだ霜がとけず、白いのです。電線の影は白い霜の線のままなのです。

「今日は、少ししか白い影がないね。」

私達母子だけがわかる「今朝は暖かいね。」という会話です。

歩くって本当にいいですね。

○お弁当と給食のこと

ある秋の日の午後、公園で、他の園や、保育園に行つた友達と久しぶりに遊びました。

母親達もベンチに坐つて、のんびりと井戸端会議がはじまりました。

「お弁当、大変ね。うちの園は、給食がはじまつたのよ。この前、うちの息子が休んだ時、届が遅かったのか、給食が息子の分も届いちやつて、わざわざ先生が持ってきて下さったのね。食べてみたら、おいしいのよ。」

母親達は興味津々。

「給食センターではなく、ちゃんとした仕出し屋さんに頼んでるらしいの。毎日メニューは違うし、栄養も色々考えてあるし、お弁当じや、そこまでできないわね。」

「給食費は？」

「安いのよ、一食二百円しないわよ。」

「メニューは？」

「ごはんも毎日違うし、野菜も多いし、子どもが好きそうな動物や花の形にぬいてあつたり、手がこんでるの。皆と同じものを食べるから、よく食べてくるわよ。」

毎日のお弁当づくりは正直いって楽ではありません。この話を聞きながら、毎日の娘のお弁当のみじめさに、

小さくなりたい気持ちでした。

そうか。給食にする園もよく考えているのだな。ただ母親の安易なニーズに流されているだけではないようだ。頭から給食のある園はダメといこんでいた私は、狭かったナとツッパリ頭を反省する気がおこりはじめた時、彼女は続けました。

「週二回、お弁当の日があるんだけど、息子つたら頭に

きちゃう。『今日は給食？ お弁当？』って毎朝きく

の。『お弁当よ』っていようと『エーッ』って露骨にいやな顔をするし『給食』っていようと『ワーイ』って飛び上つて喜ぶのよ。失礼しちゃうと思わない。』

母親としては、楽をしたい気持ちもわからないではないけれど、おかあさんと慕つてくれる今の時期、お弁当づくりまで他人にまかせる程、疲れてもいいなし、忙しくもない。

そうだ。子ども達に、おかあさんの作ってくれたお弁当を『エーッ』といやな顔をさせる結果になつている給食は、やはり、本当の幼児教育者のすることではない。

毎日、子どもが喜ぶからといって、お子様ランチを食べさせにいく親がどこにいますか。

ひょっとしておかあさんの体調が悪くて、おにぎりだ

けのお弁当であったとしても、おかあさんが、私のためににぎつてくれたおにぎりだからおいしいのであり、おかあさんを思いやることもできます。お友達のお弁当がかわいいくなる時もあるかもしれないけれど、それはそれでいい体験もあるし、全部食べて帰った時の、おかあさんの喜ぶ顔もみたいし、「今度は〇〇入れて。」と言つてみようかなとも思うし……。

私と「幼児の教育」誌との出会いは、十七年前にさかのぼります。

当時、お茶の水女子大学附属幼稚園内に児童学科津守研究室があり、その中で、当誌編集部の机がありました。楽しげに企画について話していました。当時の編集者の方を思い出します。

幼稚園教諭時代、「幼児の教育」誌は、日々の保育の指針となってくれる力強い存在でした。

我子を持ち、地域にもどったこの四年は、年に一度ずつ母親としての歴史を書かせていただき、流れていく毎日を意識的に暮らす励みになつておりました。

倉橋惣三先生をはじめ、保育界の重鎮の方々の文章にふれ、この、歴史ある雑誌を編集する責任と喜びを、感じています。

子どもの数が少なくなっていることの各方面への影響は? あちらこちらに、

子どものための施設や、イベントは豊富

だが、はたして家庭の、地域の、日々の

子育て能力は? 世の中、きれいになり

すぎて、子どもに必要なものまで不潔視

していくいか? 等の問題に取り組み、

各方面の方々、特に毎日、子ども達と過ごしていらっしゃる方々に寄稿して頂きたいと考えております。

四月号は、教育課程審議会委員でいら

つしやる河野重男先生に、巻頭言を書いていただきました。

「子どもと」の清水光子先生、「南の島の子どもたち」の浅野恵美子先生、「臨床の現場から子育てを考える」の飽田典

子先生には、長年の御経験から思うことを連載していただけることになりました。

「幼児の教育」誌が、皆様の保育、育儿、研究のよき仲間であります様、努力してゆきます。又、ご意見をお聴かせいたければ幸いです。よろしくお願ひいたします。

幼児の教育 第八十七卷 第四号

四月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十三年三月二十五日 印刷
東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日 本 幼 兒 園 協 会

印刷所 東京都港区三田五ノ一二ノ一

発売所 株式会社 フレーべル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

元気な子どもの
室内遊具。

キンダートリムランド®

遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育む
システム遊具。単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩な
バリエーションが可能なシステム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉

■特長

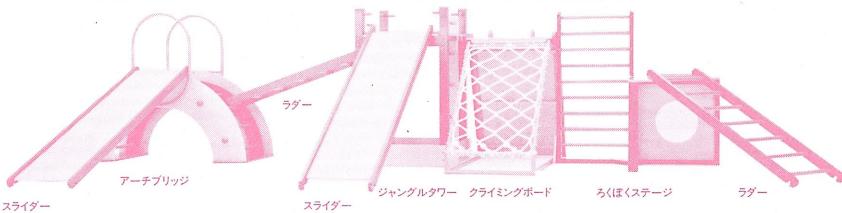
- それぞれの遊具は単体で遊ぶことはもちろん、スライダー(すべり台)やラダー(はしご)を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。

■生産物賠償責任保険付



登って、滑って、
楽しく遊んで体力づくり。

総合セットコンビネーション例



ジャングルタワー、ろくばくステージ、アーチブリッジ、クライミング
ボード 各1、スライダー、ラダー 各2

ジャングルタワー	ろくばくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製 ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製 ポリウレタン塗装、 スチールパイプ 燃付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製 ポリウレタン塗装、 スチールパイプ 燃付塗装、 ビニロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	3025-06 ¥23,000

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

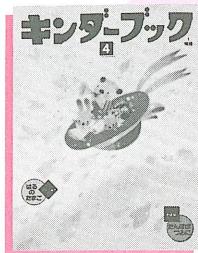
子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

'88 フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

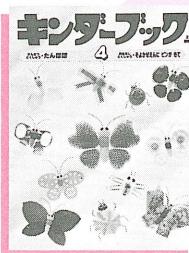
ゆたかな情操と創造する心を大切にする
キンダーブック①(情操)



A4ワイド判／34頁／特別付録「ワ
イド版カラー工作」「シール」「こい
のぼり」／280円

- 年中児を対象とした生活絵本。
季節感、生活感を盛りこんだ「おはなし
の集」などを、楽しく展開していきます。

観察する目と 考える心をそだてる
キンダーブック②(観察)



A4ワイド判／36頁／特別付録「お
もしろいいろブック」「シール」「こ
いのぼり」／280円

- 年長児を対象とした生活絵本。
子どもの生活観察する目を通して必
をそだてるお手伝いをします。

はじめての生活絵本
キンダーブック ジュニア

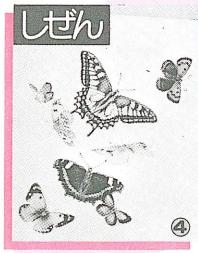


L判／22頁／付録母親向け解説書「こ
くま通信」／4月号特別付録「シール」
「こいのぼり」／250円

- 年少児を対象とした総合生活絵本。
届けします。

自然の不思議を
感動的に伝える

しせん—キンダーブック③



L判／32頁／上製本／特別付録「こ
いのぼり」／330円

- 子どもの興味と関心の芽ばえに身近な物
を通してやさしく語りかける科学絵本。
美しいスーパーリアリズムの世界！

園生活で
はじめて出会う絵本
ころころえほん



A B判／20頁／特別付録「こいのぼ
り」／250円

- 先生やお母さんとともに、あたたかいス
キンシップのお手伝いをします。
リズミカルなおはなしを繰り広げます。

絵本を開く
楽しさをあたえる
キンダーメルヘン

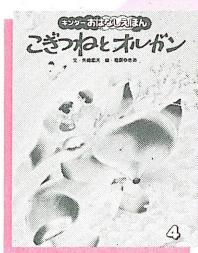


L判／26頁／特別付録「こいのぼり」
／250円

- 子どもたちの豊かな創造力をグングン伸
ばします。

夢と感動する心を そだてる

キンダーおはなしえほん



L判／32頁／上製本／特別付録「こ
いのぼり」／330円

- 子どもたちの夢と感動する心を大切にはぐ
くむおはなし絵本です。

選びぬかれたおはなしえほん
キンダーネ名作選



L判／32頁／特別付録「こいのぼり」
／250円

- キンダーおはなしえほん20年の歴史の中か
ら語り継がれる好評の絵本の数々をお届
けいたします。

幼児の学習意欲を 生みだす
がくしゅうおおぞら



A4変形判／36頁／別冊付録「おか
あさんのほん」／特別付録「あいうえ
おひょう」「こいのぼり」／300円

- 5歳児を対象とした総合学習絵本。
知る・覚える楽しさを学びます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

お茶の水女子大学
児童学研究室